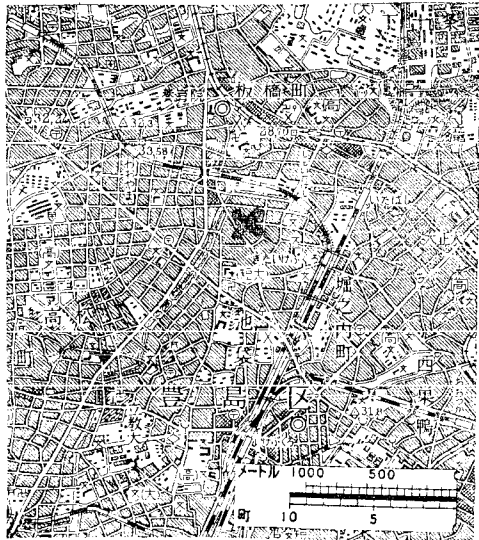


資料紹介

池袋(東)貝塚について

1 池袋貝塚は、東京都豊島区池袋五丁目氷川神社東裏にあって、縄文時代中期から晩期の土器・石器など多数を出土した。現在、貝塚のあった神社周辺には住宅が密集し、貝塚はまったく破壊されている(第1図、第2図)。この小報は、明治年間の人類学雑誌などの文献、および貝塚付近に住む稲垣義松氏・山内奥氏の話、ならびに稲垣義松氏・花園有連氏所蔵の遺物を参考に、紹介を行うものである。

2 池袋貝塚は、東上線下板橋駅から南に五キロメートルの地点にあって、南方より北方に延びた台地の先端上に位置していた(第1図)。貝塚は、千川支流によって、下板橋駅方面と境せられており、貝層は、深さ約三〇センチメートル、その規模は約一五〇〇平方メートル位と推察される。現在、神社の横には道路が走り、その両側は住宅が並んでいて、貝塚はおもかげを残していない。なお、この貝塚に相對して、池袋西貝塚があり、これは、東貝塚発見以前にすでに発掘されている。この西貝塚を池袋旧貝塚ここに紹介する東貝塚を新貝塚と呼ぶ。⁽²⁾

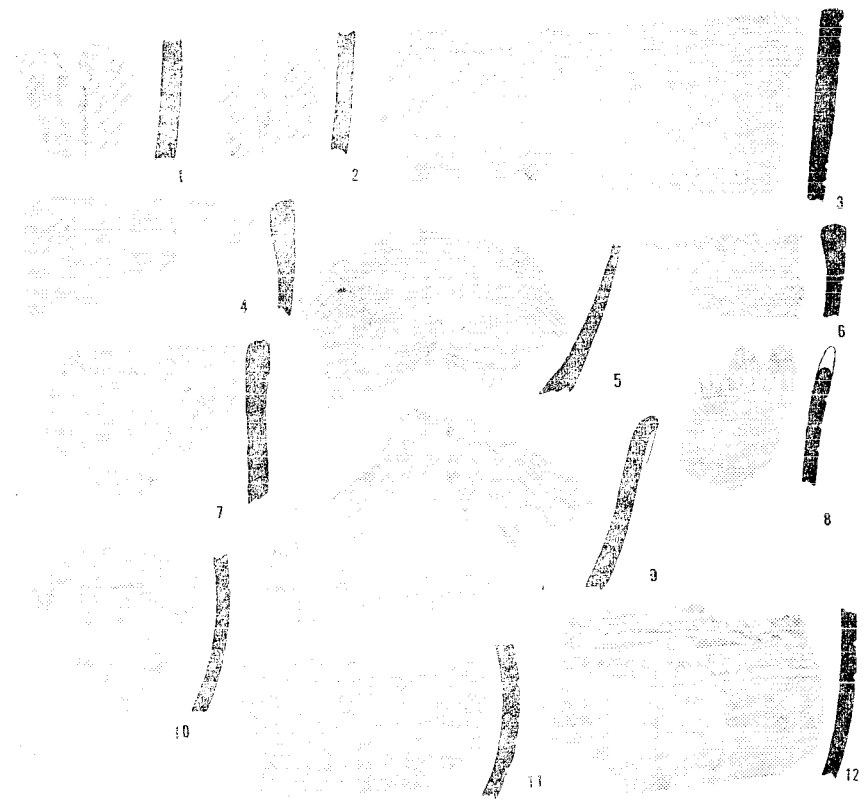


第1図 池袋貝塚の位置

小平
林井
浩宣
子子



第2図 水川神社境内（貝塚のあったところ）



第3図 池袋(車貝)塚の土器（花岡省運・稲垣武松氏蔵）

3 池袋貝塚は、明治十九年、木村政五郎氏によってはじめ、その存在が明らかにされた。⁽³⁾明治二十一年、関保之助氏は、主に玉類、石鏃に関する報告を出しているが、それによると、「池袋村が府下貝塚中、最も多く石鏃を出す地であることを述べている」また、曲玉は、土器片の出土する場所からはなれて、狭い範囲の畑から出ている。⁽⁴⁾さらに明治二十九年、藤田清次郎氏は、武蔵国北豊島郡池袋村（現在の池袋五丁目）の路傍において、散在する石片の中より、石鏃を発見した。続いて付近を調べたところ、石鏃数個、石皿片、凹石、たが石、多数の土器片を発見したという。⁽⁵⁾また、この時貝殻の散布をも認めた。その後石鏃、玉類が数多く出土したと言われている。大正初期、台地上の畑を、道路工事のために掘りかきしている際、土器片が出土した。これに興味を持った稲垣与三郎氏（義松氏、祖父）は、自宅の庭から、土器・石器を発掘した。この時の遺物には、石棒・石包丁（？）などがあったという。昭和二・三年頃、稲垣喜平氏（義松氏、父）は同じく庭から埴形の土器、獸骨を発掘した。また昭和二十四年、稲垣氏宅の庭を発掘したが、何も出土しなかったという。その後、近傍の中学、高校の生徒がこの貝塚を訪れている。

おそらく、遺物がまだ土中に埋まっている個所があると思われるが、住宅が密集しているため、発掘することは不可能であろう。

4 次に、稲垣義松・花岡省運両氏の所有している遺物をめぐって、簡単な説明を試みたい。

土器類は、かつて、いくつかの完形品があった。それらは壺形土器・注口土器であったが、現在は、すべて破片となって残存している。それらの土器は、縄文中期末から晩期にかかるもので、型的にみると、加賀利EⅡ式、安行Ⅰ式、安行Ⅱ式、安行Ⅲa・b・c式などである。図で示すと、第3図1・2は、頸垂文のみられる加賀利EⅡ式に属する。3・4・6は、口縁部の断面や文様の特徴からみて安行Ⅰ式、5は、安行Ⅱもしくは安行Ⅲ式に相当すると思われる。7は、安行Ⅱ式又はⅢa式であろうか。8は、安行Ⅲa式もしくはⅢb式と考えられる。9・10・11・12は、縄文が全くみられず、特徴的な刺突を有する点で、安行Ⅲc式と認定してまちがいない。これらの土器類の中で、主体をなしているのは、安行Ⅲc式であろう。

石器類には、石鏃、磨製石斧、打製石斧、凹石、石棒、独鈷石などがみられる。石鏃の数は非常に多く、形も大きさもさまざまな。石質も異なるものがいくつかみられる。磨製石斧は、破片で刃の部分欠けている。打製石斧は、分銅形のもので、加賀利E式土器に伴なうものである。石棒は、小形石棒の破片で、完全なものではない。独鈷石は、半分を欠き、縦十二センチメートルで、口トル、横七センチメートルの大きさで残っている。断面は楕円形で、表面は磨かれている。玉類には、青色、黄色などの丸玉様の小さな玉が多い。

ほかに貝塚を形づくっていたと思われるンジミヤ、獸骨片などもみられる。

- 註1 藤田鎮次郎「武蔵国北豊島郡池袋に於て新貝塚発見」
東京人類学雑誌第十一卷一〇号。
2 註1に同じ。
3 木村政五郎「真砂橋遺稿」東京人類学会報第七号。

- 4 関保之助「池袋貝塚より曲玉出でたり」東京人類学雑誌第四卷三二号。
5 註1に同じ。

介 紹 刊 新
松田豊一・海老沢有道共著
ポルトガル 屏風文書の研究
エヴォラ新出

明治中期、村上博士により数枚の断片が見出されたまま、空白六十十年を経過していたエヴォラ図書館にある日本古屏風内張り文書を、このたび清泉女子大学松田教授は写真撮影に成功され、それを本学海老沢教授の研究にゆだねられ、二年を費やして成ったものが本書である。まず松田氏の発見順末の報告のうち、海老沢教授の研究が収められ、百数十に及ぶ断片文書の復元・整頓、そしてその内容紹介に移り、本文書が、(1)ヴァリニョーノ編「日本のカテキズ」、(2)オルガンケイノ述「入満心得ノ事」、(3)カレンダリヨ「教会暦」、(4)「論語」、(5)安威志門関

日本思想史・東西文化交渉史上にも稀に見る重要な文獻である。特に(1)においては、日本の伝統宗教に対する批判とキリシタン教理の展開において、(2)は安土セミナリヨの講義ノートらしく、(1)と共にキリシタンの布教態度の基本的在り方を知る上に欠くべからざる文獻である。従来外国史料により推定していたものを、始めて日本文書で明らかにされたことも非常に注目すべき事である。(3)、(4)も、(1)、(2)と共にセミナリヨの講義内容及び程度を示すものであり、(5)は大部分が零簡であるが、秀吉の右衛安威氏関係のもので、本能寺変後の秀吉の統一事業遂行の一端を語るものがある。

さらに海老沢教授は、これらのものつ史的意義として、従来知られる唯一の邦文教書「妙貞問答」と対比し、その原型をここに見出すとともに、リッチの「天主教義」との対照も試みていることは注目される。

以上を前篇とし、後篇として全文の校刻がなされ、その間にまた全文書が写真で収められている。さらに巻末に英文摘要と索引とが附され、行届いた編集がなされている。ただ誤植が目につくことが惜しまれる。(三五頁部限定、昭和三十八年十一月ナツノ注開、八の四頁。(小也)

明治中期、村上博士により数枚の断片が見出されたまま、空白六十十年を経過していたエヴォラ図書館にある日本古屏風内張り文書を、このたび清泉女子大学松田教授は写真撮影に成功され、それを本学海老沢教授の研究にゆだねられ、二年を費やして成ったものが本書である。まず松田氏の発見順末の報告のうち、海老沢教授の研究が収められ、百数十に及ぶ断片文書の復元・整頓、そしてその内容紹介に移り、本文書が、(1)ヴァリニョーノ編「日本のカテキズ」、(2)オルガンケイノ述「入満心得ノ事」、(3)カレンダリヨ「教会暦」、(4)「論語」、(5)安威志門関